

随筆

久居の小屋家

飯田良樹（久居一志地区）

小屋家より久居一志地区医師会に、自宅に保管されている江戸時代からの資料を譲渡したいと申し出があった。



小屋家について書いてみる。

「久居に過ぎたるものは子午の鐘と小屋延庵」これは久居の歴史を学んでいると良く耳にする言葉である。



子午の鐘（時の鐘）は、武家屋敷の中大手町（現在の東鷹跡町）に時を知らせる鐘として元文元（1736）年に造られ、寛政元（1789）年幸町に移される。しばらく火事を知らせる鐘として使われていたが、寛政9（1797）年より時を知らせる鐘として再び突かれるようになった鐘である。



第7代の小屋延庵先生（『雲出川 第11号』より）

小屋延庵は、久居藩ができた当初、津藩から久居本町に移り住んで医業を済庵玄睦が開業。玄睦の子が延庵と代々名乗る。久居城下の町医として評判になり、藩主の耳にも入り藩から典医に命じられたが、「医は万民救済が天賦であるから、今ここで城中に上がれば幾多の患家から離れてしまい、窮民は困ってしまうだろう。君命には背くけれども医は万民の病苦を治療するのが本分である。」と固辞。藩主もこれを理解し、典医であるとともに町医としても、その生涯を万民のためにつくした。5代延庵の文化文政の頃には他藩にもよく知られ、「久居に過ぎたるものは子午の鐘と小屋延庵」と噂された。

『久居市史』『三百藩家臣人名事典 第4巻』『雲出川 第11号』などに小屋延庵について詳細に書かれているが、今回は延庵を名乗れば8代目になる小屋光雄先生を書かせていただく。

軽便鉄道である中勢鉄道を調べているときに、一枚の株主委任状を入手した。



中勢鉄道株式会社 取締役社長 小屋光雄となっているのに気付いた。中勢鉄道の歴史をみると、明治39（1906）年に伊勢軽便鉄道が設立され、明治41（1908）年に雨宮敬次郎が経営する日本各地の軽便軌道8社が合併して大日本軌道伊勢支社となった。雨宮が亡くなると大日本軌道は解体し、大正9（1920）年に伊勢支社は中勢鉄道として再出発することになる。この時の第1回株主総会委任状である。

では、小屋光雄先生とは、

伊勢国一志郡久居出身。明治21（1888）年に大阪医学校を卒業した後、東京帝国大学医科大学と伝染病研究所で学んだ。大阪府警察本部詰医・大阪地方裁判所嘱託医を務めた後、地元に帰り小屋病院を開業し、一志郡医師会長、三重県医師会評議員・議長、大日本医師会評議員などを歴任した。また久居町長、一志郡会議員、同議長、三重県会議員に選出された。大正13（1924）年、第15回衆議院議員総選挙に出馬し、当選を果たした。その他、中勢鉄道株式会社社長、伊勢電気鉄道株式会社取締役などを務めた（『雲出川 第7号』『郷土の医学史 小屋光雄先生』宮村元親著を要約）。



「三重県 人物と事業」伊勢新聞 昭和6年発行



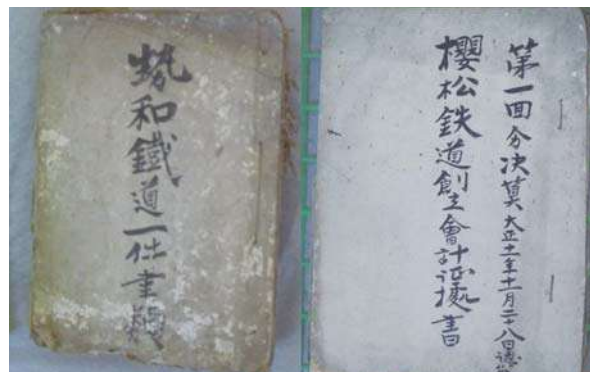
「久居町略圖」大照新聞社 昭和6年発行
（上部矢印は子午の鐘、下部矢印は小屋病院）

以上、私が調べた小屋家について書いたが、久居一志地区医師会より、当方での保管が大変なので、良い方法がないかと相談があった。元県史編纂室の吉村利男氏に相談してMieMu（ミエム：三重県総合博物館）に保管してもらう事になった。

後日、MieMu職員による小屋家の調査があり、立ち会わせていただいた。

2つの蔵には、子孫の小屋哲雄氏が整理整頓された資料が置かれていた。

まだまだ資料調査の途中であるが、私の見せて貰った資料で、許可をもらったものを提示する。



「中勢鐵道」「名松線」の基礎となった「勢和鐵道」「桜松鐵道」の書類



明治時代の小屋病院



整理された小屋病院書類



小屋光雄先生肖像写真

今後の資料報告が楽しみである。